実践事例②

岡山県立倉敷南高校

地元との「倉敷町衆プロジェクト」で21世紀型能力を育む

岡山県立倉敷南高校は、2013年度、地域の協力の下、「倉敷町衆プロジェクト」をスタートさせた。地元・倉敷が抱える課題の発見とその解決方法を考える中で、学問への志と社会性を培い、21世紀を生き抜く力を高めるのが目的だ。プロジェクトの運営には事務職員を含めた全教職員が当たり、15年度にはルーブリックも開発して、学習過程も含めた生徒たちの評価に活用している。

地域の課題解決に取り組み生徒の「学びの志」を育む

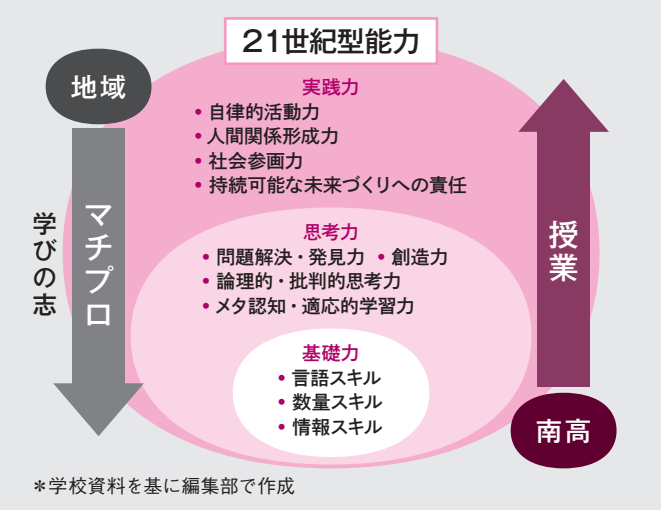
岡山県立倉敷南高校は、2013年度、倉敷商工会議所、大原美術館などと連携して「倉敷町衆プロジェクト」(以下、マチプロ)を立ち上げた。前任校で地域連携を推進してきた山下陽子校長が、進学校での地域連携を模索する中で、21世紀型能力(*)を育むキャリア教育の可能性を見いだしたのが始まりだ。

「倉敷商工会議所の方々と話す中で、『イノベーション・ポテンシャルの高い倉敷』を生かせないかと考えました。江戸時代に幕府の天領だった倉敷には、『町衆』(有力町人)が町の自治や文化を担ってきた歴史があります。新しいものへの受容力や、既存の価値観を変革するエネルギーがあり、失敗を恐れずイノベーションに取り組む伝統が根付いています。そうした精神は、今、学校に求められている教育観にも合致します。現代の『町衆』の力を借りて、生徒の潜在能力を引き出そうと考えました」(山下校長)

マチプロの目標は「学びの志を高める」「グローバル・リーダーを育成する」とし、「良き市民」を育てることを主眼とした。なぜならば、グローバル・リーダーには、第一に自らの文化への理解が求められるからだ。しかし、生徒へのアンケート結果では、『倉敷の町に関心を持っている』という生徒の割合が2割にとどまっていた。そこで、倉敷への理解を深めていく中で、学びの意欲を高め、21世紀を生き抜く力を育むことを目指した。

15年度には、「世界にも学びの場を広げよう」という「町衆」の提言を受け、カンボジア研修とニュージーランドの高校

図1 「マチプロ」と授業との関係



＊学校資料を基に編集部で作成

＊現行の学習指導要領が目指す学力の育成に向けて国立教育政策研究所が提唱する学力モデル。

有機的に結び付けるこれからの教育活動

岡山県立倉敷南高校校長
山下陽子 やました・ようこ
教職歴36年。同校に赴任して4年目。「教育が社会の『自分事』になる」

岡山県立倉敷南高校
三島誠人 みしま・まこと
教職歴29年。同校に赴任して3年目。進路課長。「教員自らがアクティブに、着実に」

岡山県立倉敷南高校
絹田昌代 きぬた・まさよ
教職歴25年。同校に赴任して7年目。授業力向上委員会主任。「生徒がきらめく授業で力と自信を付ける」

岡山県立倉敷南高校
景山晴光 かげやま・はるみつ
教職歴15年。同校に赴任して6年目。キャリア教育支援室長。「『グローバル』の種は10年後に花が咲く」

岡山県立倉敷南高校

◎校訓は「自律・友愛・進取」。2007年度に進学重視型単位制高校に移行。15年度に「キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」を受賞。
◎設立　1974（昭和49）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約320人
◎2015年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東北大、名古屋大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大、岡山県立大などに203人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ453人が合格。
◎URL　http://www.kuramina.okayama-c.ed.jp/

との交流も開始。「倉敷から世界を考える」をテーマに掲げ、「グローバル町衆育成プロジェクト」が始動した。

21世紀型能力を育むために、同校ではマチプロと授業との関係を図1のように位置付けている。アクティブ・ラーニング主体の授業を通して基礎力や思考力などを鍛える一方、マチプロの活動では、基礎力・思考力・実践力を総合的に高めながら「学びの志」を育み、日々の授業や進路選択に前向きに取り組む意欲・態度を育む。教師も、マチプロの指導を通して、同校が目指す生徒像をより深く理解し、日々の授業改善に反映させていく。

生徒が少し「背伸び」して取り組める課題を提示

マチプロの内容と成果を見ていく。

1年次では、「総合的な学習の時間」を活用し、倉敷が抱える課題とその解決策を提言する。7月に、生徒9人が1人の「町衆」を囲んで進学や仕事について語り合う「ラーニングカフェ」か、市内の企業などを訪れ、仕事内容や課題などを聞く「フィールドワーク」を行う。どちらに参加するのかは、学級内で検討して決める。そして、そこで得た課題意識を基に、夏休みに調査・研究をグループごとに進め、9月の文化祭で、調査・研究結果をポスターセッション形式で発表する。あるグループは、「子育てが楽しい」と感じている市民が約3割にとどまっている現状に課題意識を持ち、楽しみながら子育てが出来る新しい託児サービスを提案した。

2年次では、学校設定科目「キャリアⅠ」で、1年次のマチプロで得た学びを発展させた課題研究を行う。まず、生徒の進路や関心に応じて社会科学・人文科学・教育学・自然科学などの系統に学級横断で分かれ（4月）、グループまたは個人で研究テーマを決定する（6月）。そして、ポスターセッション形式での研究発表を行い（11月）、最終的に800字程度の小論文にまとめる（1月）。

各グループの指導は学年を超えて行う。教師1人当たり3～4グループを担当し、テーマ設定から調査・分析、発表まで支援する。特に、ファシリテーターとしての教師の力量が問われるのがテーマ設定だという。

「キャリア教育は広義のアクティブ・ラーニングであり、教師がアクティブでなければ、質の高いアクティブ・ラーニングは出来ません。自分の専門分野で話題になっていること、社会で起きていることなどに、教師が常にアンテナを張り、それを生徒の興味・関心につなげていく。生徒が少し背伸びして出来るくらいの選択肢を提示できるかどうかが、教師の腕の見せどころです」（山下校長）

教育分野を担当した絹田昌代先生は、漠然と「現在の教育」をテーマに挙げたグループにキーワードとして「21世紀型教育」を示した。すると、生徒たちは研究を主体的に進め、うち1人が研究内容を基に志望理由書を書き、国立大の推薦入試に挑戦した。

「生徒が自分で発見したと思えるように、さりげなくヒントを与えるのがポイントです。私たち教師は、生徒の様子を常に観察し、適切なタイミングで適切な声掛けが出来なければいけません」（絹田先生）

町衆からの根拠ある批評が生徒を鍛える

2年次でのポスターセッションでは、1年生の他に「町衆」や保護者も参加し、見学者に積極的な参加を求める。事前に「甘口」または「辛口」と書かれたくじを引き、「甘口」を引いた人は、発表内容の優れた部分を褒める役割を、「辛口」を引いた人は、不十分な点や疑問点を根拠をもって批評する役割を担う。そのため、発表内容は、「研究動機・目的」「調査結果」「未来への提言・そのメリット」「感想」の4項目で統一し、見学者が発表内容をすぐ把握できるようにしている。「町衆」からは「本当に調べたのか」「実現性はあるのか」といった鋭い批評が投げ掛けられると、絹田先生は言う。

「より良いものをつくるためには、根拠を示して、批評し合うことが大切です。辛口の批評を受けることで、核心を深く考えることの大切さ、情報を正確に伝えることの難しさを、生徒は実感したのではないでしょうか」

3年次のマチプロは、9月の文化祭で行うブロック対抗のディベート大会だ。15年度は「憲法九条」「原発」などをディベートのテーマとした。

15年度に始めたカンボジア研修では、志望理由書、面接によって、学年を問わず生徒4人を選抜。5泊7日の日程で現地の高校や大学、企業などを訪問し、倉敷の文化を紹介した。キャリア教育支援室長の景山（かげやま）晴光先生は次のように述べる。

「現地の高校生から英語で次々と質問され、生徒が答えに詰まる姿も見られましたが、途中で腹をくくったのでしょう。次第にコミュニケーションが取れるようになりました。帰国後、参加者は研修での体験を文化祭で発表しました。そうした体験談が友人や後輩に伝わっていく中で、海外交流などへのハードルが低くなることを期待しています」

独自のルーブリックで目指す生徒像を教師間で共有

同校では、独自にルーブリックを開発し、マチプロで育んだ力を21世紀型能力に沿って評価している（**図2**）。評価項目は、21世紀型能力に応じて、3領域15項目を設定。年2回（4月、12月）、生徒各自で自己評価する。

最大の特徴は、全項目をマチプロを始めとする教育活動の様々な場面を想定して設定している点だ。例えば、「A　言語的リテラシーレベル3／他のチームの発表に対し、根拠のある批評を言う」は2年次のポスターセッションを、「D　批判的・論理的思考力レベル3／自分と相手の意見の違いを理解し、異なる理由や根拠を探ろうとしている」は3年次のディベート大会を想定している。

「これを見れば、『1年次のポスターセッションではレベル2だったけれど、来年はレベル3を目指して頑張ろう』というように、生徒は具体的に目標を設定できます」（絹田先生）

15年7月に行った1回目の自己評価では、高学年になるほど全ての項目の数値が高くなるという結果が出た。21世紀型能力が順調に育まれており、ルーブリックによる評価が有効であることが実証された。

ルーブリックによって、マチプロを通して目指す生徒像を教師間で共有できるようになったことも大きいと、進路課長の三島誠人（まこと）先生は語る。

「教師が『町衆』や大学・企業に協力を依頼する際、取り組みの狙いや伸ばしたい力を具体的に伝えられるようになりました。教師の社会性を高めていくことも、キャリア教育には欠かせない視点だと思います」

目指す生徒像を具体的に持つことは、アクティブ・ラーニングを導入した授業改善にも必要になると、山下校長は指摘する。

「生徒にどのような力を求めるのかを、教師自身が自覚しなければ、授業で生徒に身に付けさせたい力を明確にしたり、アクティブ・ラーニングで適切な発問や支援を行ったり出来ません。教科ごとに新しい学力観に沿ったルーブリックを作ろうという動きも出始めており、授業改善が一層進むことを期待しています」

ルーブリックの結果を基に次年度の学校経営計画を策定

ルーブリックは、推薦・AO入試の指導にも変化をもたらした。生徒が志望理由書をまとめる際、担任は生徒が記入したルーブリックや1・2年次で作成したポスターなどを見ながら、「ルーブリックを見ると、この分野が得意のようだけれど、どうして得意になったと思う？」といった

図2　「グローバル町衆育成プロジェクト　21世紀型能力　ルーブリック」（抜粋）

（1）次のA～O（注）の項目について、あなたが現在到達していると考えるレベル段階に大きな○をつけてください。下記の記入欄にそれぞれのレベルを数字で書き込んでください。（どれにも当てはまらないと思う項目については、「1」をマークしてください。）

	基礎力（思考力を支える）			思考力（中核）
	A 言語的リテラシー	B 数量的リテラシー	C 情報リテラシー	D 批判的・論理的思考力
	読む・話す・書くといった理解・表現にかかわる力	数量的な情報を理解し、効果的に活用する力	ICTを活用して効果的に活用する力	根拠を検討し、他の解釈や情報を分析する力
レベル1	発表の際、原稿を読んで伝える。	グラフを見てデータのおよその特徴を理解する。	コンピューターを使って文章を入力する。	相手の意見を最後まで聞く。
レベル2	発表の際、聞き手の目を見ながら伝える。他のチームの発表に感想を言う。	グラフを見てデータの特徴を正確に理解する。	コンピューターを使って文章を入力する。図や写真を貼り付ける。	自分と相手の意見の違いを理解する。
レベル3	相手の反応を見ながら、適切な言葉遣いで伝える。他のチームの発表に対し、根拠のある批評を言う。	グラフを見てデータの特徴を正確に理解し、発表の際にその資料（統計・図表・グラフ）を用いる。	コンピューターを使って資料を作成したり、データをグラフ化したりする。	自分と相手の意見の違いを理解し、異なる理由や根拠を探ろうとしている。
レベル4	適切な言葉遣いで説得力のあるプレゼンテーションになっており、質問にもよどみなく答える。他のチームの発表に対し、根拠のある批評を言う。	発表の際に主張の根拠となる資料（統計・図表・グラフ）を用いる。また、引用する際には著作権に配慮する。	主張を効果的に伝えるために、グラフ作成や色彩・文字のレイアウトが思い通りに出来る。	根拠を検討したり、他の解釈や情報を分析したりして、見解が異なる理由を説明する。
レベル5	巧みな話術（ジェスチャー・声の表現・アイコンタクト）によって内容を伝え、聞き手の質問に対して当意即妙の受け答えが出来る。他のチームの発表に根拠のある批評をし納得させる。	主張の根拠となる効果的な資料を用いており、それを正確に分析することによって、相手に主張が強く支持される。また、引用する際には著作権に配慮する。	主張を効果的に伝えるため、グラフを作成し色彩や文字のレイアウトなど高いクオリティーの資料ができ、評価されている。	異なる見解を認めたり、他の視点の情報を論理的に分析したりしている。更に、根拠に基づいた多角的な視点で探求している。

自己評価記入欄	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
	春											
	冬											

（2）評価レベルの「4」「5」を選んだ生徒は、その項目の能力や価値を伸ばしたと考える活動を下から選んでそれぞれ番号で答えてください。（3つまで複数回答可）

1 授業（教科名）　2 週末課題　3 定期考査　4 実力考査　5 進路志望調査　6 個人面談　7 M-PRiDE手帳の利用　8 ラーニングカフェ
9 フィールドワーク　10 キャリア課題研究　11 キャリア講演会　12 ポスターセッション発表会　13 読書　14 ボランティア活動　15 南楠合宿
16 修学旅行　17 部活動　18 生徒会・委員会活動　19 オープンキャンパス　20 京大・阪大バスツアー　21 難関大学指導対策チーム
22 葦岡セミナー＠大原美術館　23 葦岡祭　24 留学体験　25 ディベート大会　26 その他（具体的な活動を記入）

（3）（3年次・冬に記入）上記A～Oの能力及びスキル・体得している価値観のうち1つを選んで、それを伸ばしたと考える学校生活の印象的な場面について具体的に記述してください。

＊学校資料を基に編集部で作成

ように、生徒の学びの軌跡を確認しながら指導するようになった。同校では、M-PRiDE手帳（生徒手帳）に進路ノートの要素を盛り込み、進路行事の予定や感想、教師や「町衆」からのアドバイスを書き込めるようにしている。その手帳を併用することで、生徒はより緻密な志望理由書を書けるようになった。

「志望理由書や推薦書では、生徒の活動実績や能力を具体的な言葉にしなければいけませんが、生徒も教師もそれを表現する力が不足していました。ルーブリックの文言を組み合わせることにより、若手教師でも生徒の力を十分に表現できるようになりました。これを足掛かりにして、先生方には自分の言葉で指導できるようスキルアップを図っていただきたいと考えています」（三島先生）

マチプロを通して21世紀型能力の育成と地域連携を実現させた倉敷南高校。学校を挙げて本音で議論してきたところに成功の要因があると、山下校長は分析する。

「教師全員が課題研究の指導に当たるのはもちろん、ルーブリックは管理職と各分掌・学年主任による委員会で作成しました。思い切った授業改善を行う体育・芸術・家庭科、生徒手帳を改良した生徒課、予算確保に尽力した事務室まで、組織全体が有機的に機能することが、取り組みの実効性を高めていると思います」

16年2月には、次年度の学校経営計画を策定するワークショップを全職員で実施する予定だ。ルーブリックを基に現状を分析して、課題を共有し、次年度の経営計画を策定する。

今後の課題は、取り組みの更なる精緻化と定着である。

「この3年間でマチプロの枠組みが出来ましたが、本質を見失うと取り組みは形骸化し、かえって教育の阻害要因になるかもしれません。大切なのは、“know how”ではなく、“know why”です。生徒の実情に応じて進路行事やルーブリックの内容を不断に改善すると共に、全ての教師・生徒が取り組みの意義・目的を理解し、主体的にかかわっていく意識づくりに努めたいと考えています」（山下校長）

（注）同校のルーブリックでは、「基礎力（思考力を支える）」「思考力（中核）」「実践力（思考力の使い方を方向付ける）」の3領域とし、図の項目以外に、「E 問題発見力」「F 問題解決力」「G 創造力」「H チームワーク」「I メタ認知」「J キャリア設計力」「K 自律的活動力」など、全15項目を設定している。